



らのイナん #4

思い切って告白しちゃうぞ! 編

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

らのけんってどんなお話??

三郷^{みさと}学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを主旨とした志^{こころ}しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりなんかゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。そしてまさかのラノベ作家デビュー!?



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子担当。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

「はい。ではこの場合、この角CDEは何度になるでしょうか？」

華子は黒板に描いた図を指し示しながら、生徒たちに向き直り質問した。

5時間目。数学。

昼食後、一番眠くなる時間帯のせいかな、教室には気怠い空気が蔓延している。

「えーと、今日は13日だから……じゃあ出席番号13番の田端さん、答えてください」

「はい。……あの……」

「どうしたの？ 判らない？ 難しい？」

華子に当てられた三つ編み女子は困惑した表情を浮かべて口ごもっている。

その様子に、華子は教壇からやや前のめりになって心配そうに女子生徒に声をかける。

「あの……そのイラストのどこが角CDEになるんでしょうか？」

「イラスト？」

華子は改めて黒板を振り返って硬直した。

なぜならそこにジャーズ風イケメンのイラストがどーんと描いてあったからだ。

円と多角形が重なった図を描いているつもりで、無意識のうちに華子が描いてしまったものらしい。

「こ、これは!? ごめんなさい！ これは違います！ 違うんです！ なんでもない！ なんでもないんですー！」

華子は両手に黒板消しを持って、あわあわしながらばたばたとイラストを消していく。何この可愛い生き物。うちの黒板もぜひこうやって消してもらいたい。まずその前に黒板買わなきゃだけど。

「華ちゃん先生、それ彼氏？」

「かつこいーじゃん！」

「えー、華ちゃんつきあってる人いるのー？」

「どんな人？ 何やってる人ー？」

先ほどまでの気怠い空気はどこへやら、教室中がざわざわと色めきたっていく。

「もしかして華ちゃん結婚するのー？」

「えー、マジでー!？」

「しません！ そういう質問はプライベートの心外です！ あたしは断固として遺憾の意、悪寒の尾を表明します！」

早口で応える華子の日本語は壊滅状態だった。よほど慌てているようだ。

キーンコンカンコンコン

「はい、じゃあ授業終わりますー！ 今日でできなかった78ページから82ページの応用問題は明

日までに解いておいてくださいー！」

えーなんだよー宿題多過ぎだろー横暴だーというぶーたれた声を背後に、華子はさっさと教室から出て行ってしまった。

そして廊下の角を曲がったところで、ふうーつとため息をつきながらハンカチで冷や汗をそっとぬぐった。

「華ちゃん、さっき描いてたの『紺野さん』でしょー？」

「ひっ!？」

振り返るとニコニコと笑みを浮かべる緑川萌の姿があった。

「ち、ちがいます……」

「えー、だって、ほらー？」

ぶいっと顔を背ける華子の目の前に萌がスマホを差し出した。

「そっくりじゃん？」

「!？」

そこには紺野司がアップでコーヒーを飲んでる写真があった。

どうやら先日の打ち合わせの時に萌が撮っていたものようだ。

確かにささほど華子が黒板にでかかと描いたイラストにそっくりのイケメン振りだった。

「み、緑川さん！」

「何、華ちゃん？」

突然鼻息も荒く萌に詰め寄る華子。

「この写真あたしにも転送してもらっていいですか!？」

「いいけど？」

萌がびびっと華子に写真を転送すると、華子は早速もそもそと自分のスマホをいじりだした。

「えへへ〜♪」

やがて一連の操作を終えると、華子はとろけきった笑顔でスマホの画面に見入っていた。

どうやらさきほどの写真を待ち受けに設定したようだ。

「紺野さん、やつぱりかっこいいわよね〜、本当にアルバート様みたい……」

「華ちゃん、そんなに紺野さん好きなの？」

言われた瞬間、華子は頭からつま先まで瞬時に真っ赤になった。

「しょしょしょんなことないわよ、こ、こんによさんは単なる担当さんであってあのその

この」

「そんなに好きなんだ〜」

ニコニコしながら迫ってくる萌に、華子は思わず言葉を詰まらせる。

華子はしばらくの間、金魚のように口をはくばくさせていたが、やがて俯いてこう呟いた。

「……でも本当は怖い……」

「え？」

「紺野さんのこと、好きなのは本当なだけ……! でも……! その……! なんていうか……!」

そこで言って華子は言葉を区切り、もじもじと身をよじり始めた。

「……この気持ちを紺野さんに伝えるのが怖い……だって紺野さんにとってはあたしは単なる担当作家の一人でしかないし……しかも新人賞拾い上げのペーパーだし……もし告白して断られたりしたらそのあと絶対一緒に仕事なんかできっこないし……あたし、そんなのやだし……でも紺野さん好きだし……」

「華ちゃん……」

もじもじしながらなんとか言葉を絞り出す華子を、萌はまじまじと見つめた。

そして。

「すごい! 華ちゃんでもそこまで考えるんだね!」

「どーゆー意味ですかあー!？」

萌の心外な感心つぶりに、華子はぶりぶりど怒り始める。

「あはは、ごめんごめん。そっかー、(見た目が小学生だから忘れてたけど) 華ちゃんも大人なんだね〜」

「そんな、大人ってわけじゃないですけど……」

萌はしばらくあごに手を当てて何やら考えていたが、やがてぽんと華子の両肩に手を置いた。

「判った！　じゃあ、やっぱり告っちゃおうよ、華ちゃん！」

「ええ!?」

「だって、今の宙ぶらりんの状態じゃ、原稿にも集中できないよね？　それだったら思い切つて告白した方がいいでしょ？」

「で、でもお……」

「一人の作家である前に、華ちゃんは一人の女の子でしょ？　純真な恋心を裏切っちゃ、乙女失格だよ？」

「うううん……」

萌の明快な勧めに、華子はあからさまな戸惑いで応じる。

「それにそんな気持ちで原稿書いてちゃ作品にも失礼だよ？」

「原稿に全力投球しなきゃ！」

「作品に失礼……」

萌の言葉が華子の胸にぶすりと突き刺さる。

確かにここ一週間の自分を振り返ると、司の事はかり考えていて満足に原稿が進んでいない。一生に一度のデビュー作をこんな風書いていいのだろうか……。

華子の胸にそんな想いが去来した。

「そうよね、こんなふわふわした気持ちで書いてちゃだめだよね……もし告白して断られたって、あたしが紺野さんにお願ひして担当さんは続けてもらえばいいんだし……仕事は仕事！　恋は恋！　だもんね！」

「うんうん、その意気その意気！」

「判ったわ、緑川さん！　あたし明日の打ち合わせの時、思い切つてこの気持ち伝えてきます！」

「それでこそ華ちゃんだよ！　応援してるね！」

「はい！」



とは言ったものの……。

「じゃ、白井さん、今日の打ち合わせは会議室の6番をとつてありますんで、早速行きましよう」

「は、はい！」

実際A G文庫編集部で司を目の前にすると思うように言葉が出てこない。こうして返事をするのだけでも、正直、華子はいいいいだった。

(でも、今日は言わなきゃ……絶対言わなきゃ……こんな気持ちのまま、原稿できないもの……)

華子は胸の中で何度も何度も繰り返し返す。
そして。

「あ、あの！」

「はい、なんでしよう?」

「あ、あたし、紺野さんの事が……す……す……きゃーっ!?」

肝心なところで華子はこけた。

何もつまづく物のないはずの廊下で盛大にすってんころりんした。

そして華子の倒れたその先には。

ブシューッ!!

突然廊下が真っ白に染まっていく。

そう、華子が転んだ拍子に押し倒したのはなんと消火器だったのだ!

「あ、あ……」

華子は顔がんめん蒼そう白はくになった。

なぜなら華子の目の前には消火器の粉で真っ白になってしまった司がいたからだ。

「けほっ、こほっ……」

「すすすすみませんー!」

華子は慌あわててハンカチを取り出して司のズボンを拭ぬぐが、まったくの焼け石に水状態だった。

「こほっこほっ……。ははは、私は大丈夫です。それより白井さんお怪我けがはなかったですか?」

「だ、大丈夫です! あ、ああ、あたしなんてことを……」

「いえいえ、お怪我がなかったなら良かったです。でもさすがにこのままじゃ打ち合わせできないんで、ちょっと着替えてきますね。申し訳ないですけど、白井さん、先に会議室に行つて

おいてもらえますか?」

「は、はい! 本当にすみませんーっ!」

華子は何度も何度もべこべこ頭を下げる。

司は、本当に気にしないでくださいね、と言いながら颯さつ爽そうと編集部の方に戻っていった。



会議室6。

「はああああ~~~~~……」

華子は落ち込んでいた。

それはもうこれまでの人生の中で、最大に落ち込んでいた。

(もうドジッ娘とかそんなレベルじゃないよ！単なるダメ人間だよ、あたし……)

会議室のテーブルに突っ伏したまま、華子はじたと両手両足を動かした。

その姿はまるで甲羅をつかまれて空中に引き上げられた亀のようだった。

(どうしよう……紺野さん来たらどんな顔しているのかわかんないよ、あたし……)

「すみません、お待たせしました」

会議室のドアが開き、司が颯爽と入ってきた。

華子はテーブルに顔を伏せたまま、びくつと身震いしたきり、びくりとも動かなくなった。

というか、どんな顔をしていいのか判らずに動けなくなった……というのが正確だった。

「どうしました、白井さん？ ご気分でも悪いですか？ さっきのことなら本当に全然気にしなくても大丈夫ですよ？」

「ほほ本当にすみませ」

びよんと立ち上がってまた謝罪を始めた華子だったが、目の前の司を見てまるで電源が切れたロボットのようにな動かなくなってしまった。

なぜなら。

目の前にタイトスカート姿の司の姿があったからだ。

「あの……紺野さん……それ……」

「ああ、これですか？ 私、普段はパンツしか穿かないんですけど、あいにく会社に置いてあった着替えがこれしかなくて……やっぱり似合わないですかね？」

(え、ええええ〜?!?もしかして紺野さんって……女の人だったの〜?!?)

華子の思考回路はショート寸前だった。

というかすでにショートしていた。

「おーい、紺野ー、今日8時から『てけてけ』で女子飲みやつからお前も来いよー」

「こら、篠田！ こっちは今、打ち合わせ中なんだから！」

会議室の開けっ放しのドアから、司の同僚と思しきキャリアアウーマン風の女性が声をかけてくる。

司は苦笑いを浮かべながら入り口のドアを閉めた。

「すみませんでした、白井さん。じゃ、早速打ち合わせ始めま……白井さん？」

司の驚いた顔を見て、華子は初めて自分の両目からぼろぼろと涙がこぼれ落ちていることに気がついた。

「どうしました、白井さん？ さっきのことなら、本当に、本当に気にしなくても大丈夫なん

ですよ？」

「そうじゃない……そうじゃないんです……あたし、あたし……」

喋ろうとすれば喋ろうとするほど、感情が昂ぶって言葉がうまく出てこない。

結局その後も華子は泣きじゃくってしまい、この日はまったく打ち合わせにならなかったのだった。

ここで一句。

恋心 消火器ひとつで 鎮火され

それでも続く ラノベ道かな

「うーまーくーない！(泣) 全然うーまーくーない！(泣)」「華子

「落ちてきてください、白井さん！ 一体誰と喋ってるんです!?!」(司)

つづく

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

G A文庫マガジン7月24日配信号…らのけん！

G A文庫マガジン9月合併配信号…らのけん！

G A文庫マガジン10月27日配信号…らのけん！

2 夢の最終選考編

3 はじめてのおつか……うちあわせ編